

南米ラクダ科動物の毛色・模様分類と品質改良：ペルー南部の事例

鳥塚あゆち（青山学院大学）

キーワード： ペルー南部高地、南米ラクダ科動物、毛色・模様の民俗名称、品質改良

Clasificación de los colores y distribución de manchas en camélidos sudamericanos: el caso del sur de Perú

Ayuchi TORITSUKA (Aoyama Gakuin University)

Keywords: sierra sur de Perú, camélidos sudamericanos, denominación indígena, mejoramiento de fibra de alpaca

本報告では、2023～2024年に実施したリヤマ・アルパカの毛色・模様名称調査の結果を示し、牧民共同体における家畜の品質改良の現状と問題について述べた。

南米ラクダ科家畜のリヤマとアルパカは、多様な方法で利用される。とくにアルパカの良質な毛は衣服の材料として古くから利用され、国際的にも高く評価されている。ペルーでは1960年代からこれらの品質改良が推し進められ、90年代には牧民共同体にも波及した。アルパカを中心に推進された改良は、国際市場で価値の高い白色単色で良質の毛を生産するためであり、結果、群れの「白色化」が進んだ。

他方で、毛色の多様性の喪失、有色個体数の減少、リヤマの重要性の低下という弊害も招いた。この多様性減退の危機に対し、ペルーでは有色個体回復のためのプロジェクトが実施された[鳥塚 2025]。その目的には、アンデスにおける生物多様性の保護、持続可能な家畜管理の推進、生産者の貧困の解消などが挙げられ、早くは1980年代後半から交配実験や遺伝子管理が開始されていた。しかしながら、報告者の調査地であるクスコ県の共同体ワイリヤワイリヤでは、品質改良の導入から30年ほど群れの「白色化」が継続され、2017年の調査でもその傾向に大きな変化は見られなかった。

市場価値の高い白色個体の飼養を推進することは生産者の経済的利益の面では合理的かもしれないが、市場の原理を押し付けつつ他方で色の多様性を回復しようとする国家のやり方は矛

盾してはいないか。上記プロジェクトでは牧民の伝統知への評価も目的に掲げられたが、ワイリヤワイリヤの人々は有色個体の喪失に伴いケチュア語での色名称を忘れつつあった。

南米ラクダ科動物の毛色は白・灰・茶・黒を基本色とし、色調は22色ほどであるという。これらの天然色は、アルパカの品評会では白色以外は「有色」に分類され、その別は重視されない。繊維企業では、染色後の毛も含めて記号で識別され、流行色も生み出される。織物や工芸品の製作者は、企業が提供する色見本から必要な紡糸を購入することになる。無論、牧民は家畜の毛色を区別しているし、記号で呼ぶことはない。

毛色および模様の民俗名称を最も詳細に記録しているのは Flores Ochoa [1981] であり、基本色は白・灰・茶・黒など7色、色調は白灰・黒灰・白茶・赤茶など19に分類されている。模様は、たとえば、明色を基調としそこに暗色の斑がある *alqa* と呼ばれるグループに26種のバリエーションがあるほか、明色を基調として頭か首に暗色の斑があるグループ、四肢に特徴があるグループなど36種が数えられている。

報告者の調査では、10名の成員から毛色・模様名称の聞き取りを行うことができた。リヤマとアルパカで異なる名称をもつ模様もあるとのことだが、基本的には同名称で呼ぶという。

色の名称には、*yuraq* (白)、*wicuña paqo* (淡黄)、*q'ello* (黄、淡黄)、*khurusa* (栗)、*oqhe* (灰)、*paqo* あるいは *ñaku* (ビクニーヤ)、*mosq'o* (薄茶)、*chumpi* (茶)、*puka chumpi* (赤茶)、*yawar chumpi*

(濃茶)、*yana* (黒) の 11 種が挙げられた。茶色のバリエーションが多いことがわかる。*khurusa* という色は Flores Ochoa も採録していて、栗色 (*castaño*) と説明している。成員によると単色ではなく茶に白が混じる色で、顔が白色とのことであった (図 1)。



図 1 アルパカ、*khurusa*

模様は、体色が白色と有色で半々になる *alqa*、頭部のみ白色の *ahuya*、臀部のみ有色の *ch'inque*、頸部のみ白色の *condori*、肩 (頸部の付け根) のみ白色の *tullumpi*、全体に複数の斑が広がる *moro*、頭部と臀部が黒色でそれ以外は白色・淡色の *wallata* (図 2)、頭部のみ黒色でそれ以外は白色・淡色の *quewayllo*、頭部が茶色で頸の上部が淡色で胴部は暗色の *qaqe* が採録できた。他にも、体の一部のみ有色のものは、その部分を表すケチュア語と色名称を組み合わせて名付けが行われていた (ex. *yanasenqa* : 黒鼻)。



図 2 アルパカ、*wallata*

このうち、*condori*、*wallata*、*quewayllo*、*qaqe* は高地で見られるトリの模様から命名されている。先行研究では、雨季に現れる特定のトリが家畜の出産を知らせる徴であると考えられるため、豊穰を象徴する名称だと考察されている [Palacios Ríos 2000]。ワイリャワイリャでも同

様の意味をもつのかを考察するには、成員にとってそれぞれのトリがどのような存在なのかを調査する必要があるだろう。

当該共同体では、現在でも白色単色への品質改良を継続しており、クスコ行政付属の機関でも白色化を推進している。一部の牧民は、価値の上昇を期待して有色個体を回復しつつあるものの、毛の品質は白色には及んでいない。

聞き取りからは、成員に多様性志向は存在したが経済的利益を求めて白色への改良を選択したことが明らかとなった。人々は、時代の変化のなかで生存に必要な戦略として改良活動に取り組んできたと言える。しかしながら、若年層は共同体で家畜を飼う生活に関心を失っており、品質改良の継続は困難な状況にある。アルパカに図 2 のような模様が現れるのは、改良がうまく継続されていない証拠なのである。市場主義が求めた画一的管理は、決して成功したとは言えないだろう。

現地調査では、約 10 の体色名称と約 15 の模様名称を採録でき、その一部は Flores Ochoa の記録と同名称であった。また名付けの根拠に自然との関わりが確認できた。このような民俗名称からは、牧民は市場が求める「繊維」を飼っているわけではないことが明示される。

【主要参考文献】

- Flores Ochoa, Jorge A., 1981, Clasificación y nominación de camélidos sudamericanos. En *La tecnología en el mundo andino*, Heather Lechtman y Ana María Soldi (eds.), Tomo1, Serie Antropológica 36, pp.195-215, Universidad Nacional Autónoma de México, México.
- Palacios Ríos, Félix, 2000, El simbolismo de las alpacas: Ritual y cosmovisión andina. En *Pastoreo altoandino: Realidad, sacralidad y posibilidades*, Jorge A. Flores Ochoa y Yoshiki Kobayashi (eds.), pp.189-199, Plural, La Paz.
- 鳥塚あゆみ、2025、「ペルーにおけるアルパカの白色化と有色個体の回復」、『*Aoyama Journal of International Studies*』(12) : 113-121。DOI: <https://doi.org/10.34321/TF02032788>